

平成 30(2018)年度 シラバス

- 4 年次 -

		授業形態	演習	開講年次	4 年次
授業科目名	統合基礎臨床医学（PT・OT）		担当教員	坪田 裕司	
基本項目	専 攻	科 目 区 分		単 位 数	
	理学療法学	臨床医学、疾病の原因と治療		必 修	1 単位
	作業療法学				
					履修期間 後期 (30h)
授業内容の要約	4 年間の基礎専門科目系の総まとめとして、3 専攻に共通する基礎・臨床医学系領域の知識の理解を深くかつ確実にする。基礎医学系では、人体の構造と機能、病態を、臨床医学系では生活習慣病、脳				
学修・教育目標 及び到達目標	1. 基礎・臨床医学領域の関連性について理解を深めることができるようになる 2. 各基礎・臨床領域科目の知識を理解し、専門領域科目に応用できるようになる 3. 基礎および臨床医学領域の国家試験問題が理解できるようになる				
授業の進め方 学修上の助言	専門の担当者によるオムニバス方式で講義する。国家試験過去問題を講義資料として、傾向と対策、出題の意図を解説する。 医学用語の定義を身につけること。また、各科目の知識を関連付けて理解すること。				
授業時間外に必要な学修	指定された範囲の教科書、資料などを予め読んでおくこと			必要な時間	30 分以上
授業計画	1. 生理学（坪田）/オリエンテーション、筋生理学（筋収縮エネルギー、興奮収縮連関） 2. 生理学（坪田）/筋生理学（筋反射と筋感覚、神経筋と運動単位） 3. 生理学（坪田）/神経生理学（細胞の興奮と伝達、自律神経、神経回路） 4. 解剖学（小西）／呼吸器系（肺区分）、循環器系（栄養吸収循環路、側副循環、リンパ管系）、 5. 解剖学（小西）／運動器系（骨代謝、筋・関節と運動）、内分泌、泌尿器系 6. 解剖学（小西）／神経系（中枢神経、伝導路、末梢神経） 7. 病理学（中村）／炎症、感染症、腫瘍 8. 精神医学（永井）／国試過去問題を用いて、精神医学の全範囲を総復習する 9. 内科学（岡田）／循環器疾患、呼吸器疾患、消化器疾患 10. 内科学（岡田）／代謝疾患、内分泌疾患、膠原病アレルギー疾患、感染症 11. 整形外科（亀田）／慢性関節疾患、脊椎・脊髄疾患、脊髄損傷 12. 整形外科（亀田）／骨折、外傷、末梢神経損傷 13. リハ概（亀田）／ICF、医療安全、ノーマライゼーション 14. 脳神経系（亀井）／脳の解剖生理、神経疾患の臨床診断と治療 定期試験 15. 振り返り（坪田）				
成績評価方法	項目	■課題・小テスト 10%	□レポート %	■定期試験 80 %	■その他 10 %
	内 容	授業中に実施する小テスト、あるいは課題に対するレポートの評価を10%換算する		定期試験は国試形式問題を出題する。範囲・問題数は、授業担当回数によって算出する	授業への参加度を総合評価する
教科書	著者	タイトル		出版社	発行年
	これまでに各教科担当者が指定した教科書を使用するので特段の購入の要はない。				
参考文献					
履修要件等	3 年次までの全ての科目を履修済であることが望ましい（専攻によって履修時期が異なる）				
研究室	3 号館 5 階 第 11 研究室		オフィスアワー	毎週火曜日 13：00～14：30 ※（会議のない週）※それ以外はメールで調整	

			授業形態	演習	開講年次	4 年次
授業科目名	統合基礎臨床医学 (ST)		担当教員	坪田 裕司		
基本項目	専 攻	科 目 区 分		単 位 数		履修期間
					1 単位	後期 (30h)
	言語聴覚学	臨床医学および歯科学		必修		
授業内容の要約	4 年間の基礎専門科目系の総まとめとして、3 専攻に共通する基礎・臨床医学系領域の知識の理解を深くかつ確実にする。基礎医学系では、人体の構造と機能、病態を、臨床医学系では生活習慣病、脳卒中、脊髄損傷、認知症、癌、喫煙、多重障害などのアプローチから診断、治療、術後リハビリなどについて、診療科ごとに検討していく。					
学修・教育目標 及び到達目標	1. 基礎・臨床医学領域の関連性について理解を深めることができるようになる 2. 各基礎・臨床領域科目の知識を理解し、専門領域科目に応用できるようになる 3. 基礎および臨床医学領域の国家試験問題が理解できるようになる					
授業の進め方 学修上の助言	専門の担当者によるオムニバス方式で講義する。国家試験過去問題を講義資料として、傾向と対策、出題の意図を解説する。 医学用語の定義を身につけること。また、各科目の知識を関連付けて理解すること。					
授業時間外に必要な学修	指定された範囲の教科書、資料などを予め読んでおくこと				必要な時間	30 分以上
授業計画	1. 生理学 (坪田) / オリエンテーション、神経生理学 (細胞の興奮と伝達、自律神経、神経回路) 2. 生理学 (坪田) / 代謝と酸塩基平衡 3. 生理学 (坪田) / 呼吸調節、循環調節 4. 解剖学 (小西) / 呼吸器系 (咽頭、喉頭)、発生 5. 解剖学 (小西) / 神経系 (中枢神経、脳地図、特殊伝導路) 6. 解剖学 (小西) / 神経系 (末梢神経系、脳神経と脳幹) 7. 病理学 (中村) / 遺伝性疾患、腫瘍 8. 精神医学 (永井) / 国試過去問題を用いて、精神医学の全範囲を総復習する 9. 内科学 (岡田) / 呼吸器疾患、感染症、循環器疾患 10. 内科学 (岡田) / 肝疾患、生活習慣病、内分泌疾患 11. リハビリ医学 (亀田) / リハビリテーション評価、廃用性症候、片麻痺 12. リハビリ概論 (亀田) / ICF、医療安全、ノーマライゼーション 13. 脳神経系 (亀井) / 脳の解剖生理 14. 脳神経系 (亀井) / 神経疾患の臨床診断と治療 定 期 試 験 15. 振り返り (坪田)					
成績評価方法	項目	■課題・小テスト 10%		□レポート %	■定期試験 80 %	■その他 10 %
	内 容	授業中に実施する小テスト、あるいは課題に対するレポートの評価を 10%換算する			定期試験は国試形式問題を出題する。範囲・問題数は、授業担当回数によって算出する	授業への参加度を総合評価する
教科書	著者	タイトル		出版社		発行年
	これまでに各教科担当者が指定した教科書を使用するので特段の購入の要はない。					
参考文献						
履修要件等	3 年次までの全ての科目を履修済であることが望ましい (専攻によって履修時期が異なる)					
研究室	3 号館 5 階 第 11 研究室		オフィスアワー	毎週火曜日 13 : 00～14 : 30 ※ (会議のない週) ※それ以外はメールで調整		

		授業形態	講義	開講年次	4 年次
授業科目名	医療安全管理学		担当教員	亀田 浩司	
基本項目	専 攻	科 目 区 分		単 位 数	
	理学療法学	社会福祉とリハビリの理念		必 修	1 単位
	作業療法学				
	言語聴覚学				
履修期間	前期（16h）				
授業内容の要約	リハビリテーション医療における安全とは何か、リスクマネジメントとは何か、を知る。				
学修・教育目標 及び到達目標	1. インシデント・アクシデントは、いつどこで起こるかを理解する 2. 何故、インシデント・アクシデントが発生したのかを理解する 3. インシデント・アクシデントが発生した後の対応を理解する				
授業の進め方 学修上の助言	板書およびパワーポイント 将来、「臨床現場に出た時に極めて重要になってくること」を学ぶ、これを忘れないように。				
授業時間外に必要な学修	指定された範囲の教科書を予め読んでおくこと			必要な時間	30 分以上
授業計画	1. 医療安全管理とリスクマネジメントの考え方 2. リハビリテーション中に起こりうるリスクとリハビリテーションの中止 3. リハビリテーションにおけるリスクマネジメントの考察 4. リハビリテーションにおけるリスクマネジメント（それぞれの立場から） 5. リハビリテーションにおけるリスクマネジメント（それぞれの立場から） 2 6. リハビリテーションにおけるリスクマネジメント（それぞれの立場から） 3 7. リハビリテーションにおけるリスクマネジメント（それぞれの立場から） 4 定 期 試 験 8. 総括及びフィードバック（定期試験の解答・解説）				
成績評価方法	項目	□課題・小テスト %	□レポート %	■定期試験 70%	■その他 30%
	内 容			授業の内容を全般についての理解度を評価する	授業への参加度、および授業態度を評価
教科書	著者	タイトル		出版社	発行年
	特になし	特になし		特になし	特になし
参考文献		「リハビリテーション医療における安全管理・推進のためのガイドライン」		医歯薬出版	2006
履修要件等					
研究室	1 号館 4 階 第 5 研究室		オフィスアワー	毎週金曜日 12:10～13:00	

				授業形態	講義	開講年次	4 年次	
授業科目名		関係法規		担当教員	野村 和樹			
基本項目	専攻	科目区分			単位数		履修期間	
	理学療法学	社会福祉とリハビリの理念			選択必修	1 単位	後期（16h）	
	作業療法学				必修			
	言語聴覚学							
授業内容の要約		医療に専門職として従事するということは、国民の生命や健康に影響を与える仕事に就くことを意味するとともに公共性の高い職業に従事することである。したがって、様々な法律により規制されている。臨床場面において求められる基礎知識として医療、福祉の領域の法令について、理念・目的・主要な行政の理解をはかる。						
学修・教育目標 及び到達目標		1. 理学療法士・作業療法士・言語聴覚士の専門職としての法的責務が理解できる 2. 医療・福祉に関わる法の種類と立法過程が理解できる 3. 医療・福祉に関わる法の基本的内容とその特徴が理解できる						
授業の進め方 学修上の助言		講義形式で授業を進める。学生が自ら調べるという課題を与える。教科書は用いずレジュメを配布し授業を進めるので、A4 版のファイルを用意すること。						
授業時間外に必要な学修		受講後、要点整理をされ、知識の定着を図られること				必要な時間	60 分以上	
授業計画		1. 法律とは 2. 理学療法士・作業療法士・言語聴覚士に関わる法律 3. 医療に関わる法律 医療法・医師法・保健師助産師・看護師法等 4. 障がい者領域に関わる法律 身体障害者福祉法・知的障害者福祉法・精神保健福祉法等 5. 障がい者福祉施策に関わる法律 障害者基本法・障害者総合支援法等 6. 高齢者福祉領域に関わる法律 介護保険法 地域包括ケアシステム 7. 児童福祉に関わる法律 児童福祉法、児童の権利に関する条約、児童虐待防止法 定期試験 8. 総括及びフィードバック（定期試験の解答・解説）						
成績評価方法	項目	□課題・小テスト %		■レポート 10 %		■定期試験 90 %		□その他 %
	内容			制度施策に関わる課題を提示。		全般に渡り、知識の定着度をはかる。		
教科書		著者		タイトル		出版社		発行年
		各項目に応じてレジュメを配布する						
参考文献		講義内で適宜紹介する						
履修要件等		社会保障制度、関連職種連携論、障害者福祉論を受講されていることが望ましい						
研究室		1 号館 4 階第 1 研究室			オフィスアワー	毎週水曜日 12:10～13:00		

		授業形態	演習	開講年次	4 年次
授業科目名	卒業論文		担当教員	中村 美砂 ・ 各担当教員	
基本項目	専 攻	科 目 区 分		単 位 数	
	理学療法学	卒業研究		選択必修	2 単位
	作業療法学				
	言語聴覚学				
履修期間	後期（30h）				
授業内容の要約	卒業研究発表までに取り組んできた研究内容を論文としてまとめる。論文作成までの一連のプロセスを学ぶ。				
学修・教育目標 及び到達目標	1. 自己の主張や発見を客観的に記述できる 2. 科学的な表現能力を理解できる 3. 研究結果を論文としてまとめることができる				
授業の進め方 学修上の助言	指導教員のもとで研究テーマに沿って、論文を仕上げる。				
授業時間外に必要な学修	自身の研究テーマに関連する研究論文や資料を収集する。			必要な時間	分以上
授業計画	論文作成のスケジュールは、個人によって異なり、かつ、進展にあわせ動的に見直しされることになる。下記に授業計画のモデルケースを示す。 1. 卒業研究発表会の振り返り 2. 卒論の章立ての決定 3. 原稿の提出とフィードバック 1 4. 原稿の提出とフィードバック 2 5. 原稿の提出とフィードバック 3 6. 原稿の提出とフィードバック 4 7. 完成稿の提出 8. 総括及びフィードバック				
成績評価方法	項目	■卒業論文 80 %	■執筆態度 20 %	□定期試験 %	□その他 %
	内容	主査1名（指導教員）および副査2名の計3名が、卒業論文の評価を行う。	主査1名（指導教員）が、執筆態度の評価を行う。		
教科書	著者	タイトル		出版社	発行年
	指導教員による紹介				
	各自で決定				
参考文献	白井利明他	よくわかる卒論の書き方		ミネルヴァ書房	2013 年
	文献検索等により必用な文献を得る				
履修要件等	「卒業研究」が履修済みであること。				
研究室	各担当教員 研究室		オフィスアワー	各担当教員 オフィスアワー	

			授業形態	講義	開講年次	4 年次	
授業科目名	就労支援学		担当教員	谷口 英治・高野 珠栄子			
基本項目	専 攻	科 目 区 分		単 位 数		履修期間	
	理学療法学	地域・予防医学的リハビリテーション		選択必修	1 単位	前期（16h）	
	作業療法学	作業療法治療学					
	言語聴覚学	社会福祉とリハビリの理念					
授業内容の要約	人の社会生活を考えるときに最も基本的な営みである就労・職業を理解し、医学的知識に基づく障害の理解と就労における関連職種の役割を学ぶ。併せて就労支援活動の評価、法的根拠、障害者に対する社会資源、制度の情報支援の利用方法、サポートシステムの現状についての基礎知識を学ぶ。						
学修・教育目標 及び到達目標	1.就労・職業の意味を探り、就労・職業技能の発達について理解できる 2.職業リハビリテーションの概念について理解できる 3.就労支援活動における関連職種の役割について述べることができる 4.法制度、及び各領域の就労支援について理解できる						
授業の進め方 学修上の助言	講義を中心として、演習（検査等を含む）を適宜加える 対象者の就労・職業生活に関わる内容なので、社会情勢や出来事の事象に関心をもつこと						
授業時間外に必要な学修		配布したプリントを必ず読んでおくこと。働く意義を考える。			必要な時間	30 分以上	
授業計画		1. 障害者の支援制度について（谷口） 2. 障害者の就労を支援するジョブコーチについて（谷口） 3. 知的、及び精神障害者の就労支援について（谷口） 4. 就労支援に関わる評価について（谷口） 5. 就労支援活動の概念（高野） 6. 人の職業的発達（高野） 7. 職業リハビリテーションの概念（高野） 定 期 試 験（レ ポ ー ト） 8. 総括及びフィードバック（定期試験の解答・解説）					
成績評価方法	項目	□課題・小テスト %		■レポート 100 %		□定期試験 %	□その他 %
	内 容			障害者が就労（働く）する意義について			
参考文献	著者	タイトル			出版社		発行年
	田川義勝ほか	「社会生活行為学」			医学書院		2007
	菊池恵美子ほか	「職業リハビリテーション学」			協同医書出版		2007
	平賀昭信ほか	「作業療法技術論 3 職業関連活動」			協同医書出版		2010
	石川齊ほか	「図解 作業療法技術ガイド」			文光堂		2011
履修要件等							
研究室	谷口：1 号館 5 階 第 18 研究室 高野：1 号館 5 階 第 13 研究室		オフィスアワー	谷口：毎週月曜日 16:20～17：00 高野：毎週水曜日 13:00～14：30			

				授業形態	講義	開講年次	寺山久美子 4年次
授業科目名		総合リハビリテーション 地域連携論		担当教員	寺山 久美子 他		
基本項目	専攻	科目区分		単位数		履修期間	
	理学療法学	地域・予防医学的リハビリテーション		必修	1単位	前期（16h）	
	作業療法学						
	言語聴覚学						
授業内容の要約		本講義は1～3年次に配当された「地域・予防的リハビリテーション」科目群の総まとめ的役割を果たし、また臨床実習地やリハの現場で実施・模索されている多職種連携、当事者主体の総合リハ地域連携の現状と課題あるべき姿を4つの実践例から学ぶことを目的としている。					
学修・教育目標及び到達目標		1. 総合リハ、地域連携、多職種連携とは何かを説明できる 2. 1のための共通基盤（共通概念・言語～IPE，IPW，ICFなど、連携協働マインド）を説明できる 3. 総合リハ・地域連携の実践の現場の現状と課題及びリハ職の役割と課題を説明できる					
授業の進め方 学修上の助言		寺山による総論、外部講師4名によるプレゼンテーション、及び地域関連の授業担当の内部教員（古井、石川、高橋）によるメッセージの発信から成る。					
授業時間外に必要な学修		実践編についてはあらかじめ当該HPで把握しておくが良い				必要な時間	各30分以上
授業計画		1. 総論1 総合リハの意味・形・場、多職種連携と地域連携の形・役割等（寺山） 2. 総論2：共通基盤（IPE，IPW，ICF）、連携マインドとリハ（寺山） 3. 実践編1：病院から地域へ（河崎病院PT 阿部） 4. 実践編2：訪問リハビリテーションの場合（かなえるリンクOT 関本） 5. 実践編3：大東市における総合リハ・地域連携のかたち（大東市役所PT 逢坂） 6. 実践編4：生活期のリハビリテーション（日本訪問リハ協会 伊藤） 7. 総論3：総合リハ・地域連携の中でPT・OT・STがより活躍できるように～地域関連担当教員からのメッセージ（PT古井、OT石川、ST高橋、まとめ寺山） 定期試験（レポート） 8. 総括及びフィードバック（定期試験の解答・解説）：（寺山）					
成績評価 方法	項目	□課題・小テスト %		■レポート 100 %		□定期試験 %	□その他 %
	内容			阿部、関本、逢坂、伊藤の各講師からの講義内容を含め寺山がレポート課題を作成・評価する。			
教科書		著者	タイトル			出版社	発行年
		特に定めない					
参考文献		日本リハビリテーション医学会監修	リハビリテーションと地域連携・地域包括ケア			診断と治療者	2013
履修要件等		年次臨床実習に参加可能な学生					
研究室		1号館1階 副学長室・学科長室			オフィスアワー	毎週水曜日 13：00～14：30	

				授業形態	講義	開講年次	4 年次	
授業科目名		予防医学的 リハビリテーション概論		担当教員	亀田 浩司			
基本項目	専 攻	科 目 区 分			単 位 数		履修期間	
	理学療法学	地域・予防医学的リハビリテーション			選択必修	1 単位	前期（16h）	
	作業療法学							
	言語聴覚学							
授業内容の要約		公衆衛生や疫学、社会医学とは異なった観点から予防医学的リハビリテーションの概念を理解する。健康なうちから、がん対策、循環器予防、ストレス、加齢、悪い生活習慣を正しく見つけ、これらの改善策を探り、QOL の向上を図るために栄養、運動、コミュニティなどを連携させて、創生を考えていく。						
学修・教育目標 及び到達目標		1. 予防医学的リハビリテーションの概念が理解できる 2. 生活習慣病と運動の関係について理解できる 3. 第一次予防（健康増進）としての運動療法を学ぶ 4. 生活習慣病などに対する運動療法を学ぶ						
授業の進め方 学修上の助言		板書にて行い、適宜参考資料を配布する。						
授業時間外に必要な学修		指定された範囲の教科書を予め読んでおくこと				必要な時間	30 分以上	
授業計画		1. 予防医学的リハビリテーションの概念 2. 生活習慣病を引き起こすメカニズムと運動との関係 3. 第一次予防としての運動プログラム① 4. 第一次予防としての運動プログラム② 5. 糖尿病に対する運動効果と具体的運動プログラム 6. 高血圧に対する運動効果と具体的運動プログラム 7. 高脂血症に対する運動効果と具体的運動プログラム 定期試験 8. 総括及びフィードバック（定期試験の解答・解説）						
成績評価方法	項目	□課題・小テスト %		□レポート %		■定期試験 70 %	■その他 30 %	
	内 容					授業の内容を全般についての理解度を評価する	授業への参加度、および授業態度を評価。	
教科書		著者		タイトル		出版社		発行年
				特になし				
参考文献								
履修要件等								
研究室		1 号館 4 階 第 5 研究室			オフィスアワー	毎週金曜日 12:10～13:00		

		授業形態	講義	開講年次	4 年次
授業科目名	障害予防概論		担当教員	古井 透	
基本項目	専 攻	科 目 区 分		単 位 数	
	理学療法学	地域・予防医学的リハビリテーション		選択必修	1 単位
	作業療法学				
	言語聴覚学				
履修期間	前期 (16h)				
授業内容の要約	同じ予防でも「傷害を予防する」「障害を予防する」この二つは似て非なるものである。ICF や国連の障害者権利条約という障害をめぐる 30 年の議論をもとに、社会が作る障壁と生物学的・バイオメカニカルな傷害発生とははっきり区別し、参加と QOL の向上を目指す筋道について考える。				
学修・教育目標 及び到達目標	1. 障害に対する否定的態度の変容と共生社会の実現について自分で考えられるようになる 2. 障害をもつ人や人生の途中で障害をもった人が生活の狭小化をひきおこす過程を説明できる 3. 社会参加を計測する OUTCOME 指標について理解する				
授業の進め方 学修上の助言	資料は事前配布する。2～6 回の授業では、前回の確認テストと話題の提供およびその内容への質問と解説を一コマで実施する。確認テストのあと答案用紙を授業中に赤ペン・青ペンで加筆修正し、その日の午後 6 時までに事務局に提出すること。ICF や権利条約について興味のある文献の予習を勧める。				
授業時間外に必要な学修	2～7 回は配布資料を各自事前に DL して予習しておく。次回までに、その講義の内容を整理し小テストの準備をする。			必要な時間	30 分以上
授業計画	1. 社会防衛思想から人権思想へ：らい予防法廃止とハンセン病国家賠償 2. 権利条約と ICF から二次障害を考える；子供の時からの障害者の加齢（小テスト） 3. 生活機能を支える身体の機能構造の理解 1；循環障害・栄養障害，（小テスト） 4. 廃用症候群、脱水と排泄（「介護予防の戦略と実践」 p 135-84、配布資料 2）（小テスト） 5. 認知症周辺症状の理解とうつ予防（「介護予防の戦略と実践」 p63-75 と配布資料 7）（小テスト） 6. 社会参加の計測演習 CHART (Craig Handicap Assessment and Reporting Technique) (小テスト) 7. 拘縮の定義とその予防（配布資料 1）体験学習（小テスト） 定 期 試 験（レポート） 8. 総括及びフィードバック：拘縮予防のポジショニングと誤嚥を防ぐシーティング実技				
成績評価方法	項目	■課題・小テスト 40%	■レポート 60%	□定期試験 %	□その他 %
	内 容	確認テスト後の提出物の学びを評価する	障害に対する否定的態度の変容と共生社会の実現		
教科書	特になし				
参考文献	著者	タイトル		出版社	発行年
	Julie.K. Silver	Post-Polio Syndrome A guid for olio survivors & their families		Yale university Press	2001
	大谷藤郎	「医の倫理と人権」		医療文化社	2005
	山本和儀	「山本和儀の地域リハ」		年友企画	2000
	「いつかはあなたの街のことに 原発と優生思想」制作実行委員会	いつかはあなたの街のことに 原発と優生思想		「いつかはあなたの街のことに 原発と優生思想」制作実行委員会	2016
履修要件等	特になし				
研究室	1 号館 5 階 第 20 研究室		オフィスアワー	毎週火曜日 11：40～12：40	

			授業形態	講義	開講年次	4 年次
授業科目名	公衆衛生学		担当教員	竹下 達也		
基本項目	専 攻	科 目 区 分		単 位 数		履修期間
	理学療法学	地域・予防医学的リハビリテーション		選択必修	1 単位	前期（16h）
	作業療法学					
	言語聴覚学					
授業内容の要約	公衆衛生学は、個人および集団の疾病予防と健康の保持増進を図るための方法論に関する学問分野である。個人および集団の健康に影響を与える諸要因を明らかにするための疫学的研究方法について解説する。さらに各論として、ライフスタイルと健康、生活習慣病の遺伝・環境要因、発がん予防等について述べる。					
学修・教育目標 及び到達目標	1. 集団における健康事象の頻度と分布を記述する方法について説明することができる 2. 健康に影響を与える諸要因を解析する方法を説明することができる 3. 疾病予防、健康増進の意義と方法を説明することができる 4. がんや循環器疾患などの重要な健康事象の要因と予防方法について説明することができる					
授業の進め方 学修上の助言	パワーポイントを用いて授業を行う。下記教科書以外にも、適宜、教科書、参考書を紹介するので、学習に役立てていただきたい。					
授業時間外に必要な学修	教科書・参考書を用いた予習・復習				必要な時間	30 分以上
授業計画	1. 公衆衛生学総論（公衆衛生学・予防医学の歴史と意義）（教科書 p1～24） 2. 疫学方法論（1）（疫学指標、疫学研究のデザイン）（教科書 p61～86） 3. 疫学方法論（2）（分析疫学、コホート研究、症例対照研究）（教科書 p61～86） 4. 疫学方法論（3）（疫学的因果関係、介入研究）（教科書 p61～86） 5. ライフスタイルと健康（1）（生活習慣と循環器疾患）（教科書 p131～158） 6. ライフスタイルと健康（2）（生活習慣とがん）（教科書 p135～139） 7. 生活習慣病の遺伝・環境要因（アルコール感受性、遺伝子多型） 8. 総括及びフィードバック（全講義の振り返り）					
成績評価方法	項目	□課題・小テスト %	■レポート 100 %	□定期試験 %	□その他 %	
	内容	課題は、第7回の授業で提示する。与えられた課題を講義内容の視点と絡めて深く考察しているかどうかを評価する。				
教科書	著者	タイトル		出版社	発行年	
	岸玲子ら	「NEW 予防医学・公衆衛生学 改訂第3 版」		南江堂	2012	
参考文献	厚生労働統計協会	「国民衛生の動向」2016/2017 年版		厚生統計協会	2016	
履修要件等						
研究室	1 号館 1 階 非常勤講師控室		オフィスアワー	授業終了後、質問を受け付ける		

		授業形態	講義	開講年次	4 年次
授業科目名	理学療法マネジメント		担当教員	畑中 良太	
基本項目	専 攻	科 目 区 分		単 位 数	
	理学療法学	基礎理学療法学		選択必修	1 単位
				履修期間	
				後期（16h）	
授業内容の要約	理学療法サービスを提供するための、さまざまなマネジメント（管理）を学ぶ				
学修・教育目標 及び到達目標	1. 理学療法を管理することについて理解できる 2. 自ら管理学について学習できる				
授業の進め方 学修上の助言	・講義と学生発表で行う。 ・皆さんが飛び込んでいく医療業界についての話(事情)。 ・興味がある人の積極的な受講が望ましい。				
授業時間外に必要な学修	自主的に関連する書籍を読む			必要な時間	30 分以上
授業計画	1. 組織とは 2. 人の管理 3. 経済性の管理 4. 情報の管理 5. 教育・研究の管理 6. 環境とシステム 7. 自己管理 定期試験（レポート） 8. 総括及びフィードバック（定期試験の解答・解説）				
成績評価方法	項目	■課題・小テスト 50%	■レポート 50%	□定期試験 %	□その他 %
	内容	パワーポイントで発表	発表した内容を提出		
教科書	著者	タイトル		出版社	発行年
	細田多穂他	理学療法政策学・管理学テキスト		南江堂	2018(予定)
参考文献					
履修要件等					
研究室	3 号館 2 階 第 29 研究室		オフィスアワー	毎週金曜日 12:00～13:00	

			授業形態	講義	開講年次	4 年次
授業科目名	統合理学療法学		担当教員	村西 壽祥/ 理学療法学専攻教員		
基本項目	専 攻	科 目 区 分		単 位 数		履修期間
	理学療法学	理学療法治療学		必 修	1 単位	後期 (30h)
授業内容の要約	これまで学んできた座学での内容や実習を踏まえながら、理学療法学の総まとめを行い、国家試験に備える					
学修・教育目標 及び到達目標	1. 理学療法士国家試験合格レベルにおける知識が習得できる 2. 理学療法士として実際に業務することができるための理学療学分野の内容を習得できる					
授業の進め方 学修上の助言	理学療法学専攻教員および外部講師(理学療法士)によるオムニバス形式にて進める					
授業時間外に必要な学修	各領域で使用された教科書や指定された参考書、資料などを予め読んでおくこと				必要な時間	講義以外の時間 自宅での学習 30 分以上
授業計画	1. 2. 理学療法評価法 3. 4. 運動療法総論・臨床運動学・生体力学 5. 6. 物理療法 7. 8. 日常生活活動 9. 10. 生活環境論・地域理学療法・理学療法概論 11. 12. 切断/義肢・装具 13. 14. 呼吸循環・代謝系理学療法 15. 16. 運動器系理学療法学 17. 18. 神経系理学療法学(小児/神経筋疾患) 19. 20. 神経系理学療法学(脳血管障害/脊髄損傷) 21. 22. 【特別講義】臨床心理学 23. 24. 【特別講義】精神医学 25. 26. 定 期 試 験 27. 28. 総括及びフィードバック					
成績評価方法	項目	□課題・小テスト %	□レポート %	■定期試験 100 %		□その他 %
	内 容			定期試験で理学療法全般についての理解度を評価する		
教科書	著者	タイトル		出版社		発行年
参考文献		「理学療法士・作業療法士国家試験 必修ポイント 理学療法基礎編」		医歯薬出版		2018
		「理学療法士・作業療法士国家試験 必修ポイント 理学療法疾患別編」		医歯薬出版		2018
		「国試の達人 理学療法編」		アイペック		2018
履修要件等	4 年次前期までに履修すべき単位を習得していること					
研究室	1 号館 5 階 第 21 研究室		オフィスアワー	毎週火曜日 12 : 10～13 : 00		

		授業形態	演習	開講年次	4 年次
授業科目名	理学療法技術論		担当教員	小太 武陸 ・ 森藤 武	
基本項目	専 攻	科 目 区 分		単 位 数	
	理学療法学	理学療法治療学		必 修	1 単位
授業内容の要約		各種疾患によって生じた障害構造を理解し、解剖学や生理学などの基礎医学並びに生体工学 (物理学・バイオメカニクスなど) などに基づいて、理学療法の思考や技術を学習する。			
学修・教育目標 及び到達目標		1. 各種疾患 (障害) 毎の障害構造を理解ができる 2. それらに対する理学療法の適応と禁忌ならびに注意点を理解し、基本的な評価や理学療法を実践できる			
授業の進め方 学修上の助言		講義および演習			
授業時間外に必要な学修		授業で学んだ知識・技術の復習		必要な時間	60 分以上
授業計画		1. 神経学的アプローチ 2. クラインフォーゲルバッハⅠ 3. 神経筋促通法 (PNFⅠ) 4. 神経筋促通法 (PNFⅡ) 5. レッドコードエクササイズⅠ 6. レッドコードエクササイズⅡ 7. 中枢障害に対する各種評価の実践 8. 運動器障害に対する各種評価の実践 9. 体幹の機能障害に対する理学療法の実践 10. 上肢の機能障害に対する理学療法の実践 11. 股関節の機能障害に対する理学療法の実践 12. 膝関節の機能障害に対する理学療法の実践 13. 各種症例に応じた理学療法技術練習と実技試験① 14. 各種症例に応じた理学療法技術練習と実技試験② 定期試験 15. 総括及びフィードバック (実技試験の解答・解説)			
成績評価方法	項目	■課題・小テスト 20%	□レポート %	■実技試験 80%	□その他 %
	内 容	授業中に実施した内容の理解度を課題・小テストにて評価する		授業中に実践した理学療法技術の習得度を評価する	
教科書	著者	タイトル		出版社	発行年
	なし				
参考文献	小柳磨毅 編	「実践PTノート 運動器傷害の理学療法」(第2版)		三輪書店	2011
履修要件等					
研究室	1 号館 4 階 第 3 研究室 (代表)		オフィスアワー	毎週木曜日 12 : 10～13 : 00	

		授業形態	演習	開講年次	4 年次
授業科目名	理学療法学 PBL		担当教員	酒井 桂太・理学療法学専攻教員	
基本項目	専 攻	科 目 区 分		単 位 数	
	理学療法学	理学療法治療学		選択必修	1 単位
履修期間		前期（16h）			
授業内容の要約		問題解決型学習の方法論を取り入れ、ケーススタディを通して、各教員がチューターとしてつき、小グループごとに理学療法アプローチについて学習する。			
学修・教育目標 及び到達目標		1. 症例紹介のプロフィールからリスク管理を踏まえて、理学療法評価計画を立てられる 2. 症例の全体像、ADL 状況、動作観察の情報から、障害を予想し検査測定項目を選択できる 3. これまでのデータと検査・測定結果から症例の障害構造について理解する 4. 評価内容から理学療法プログラムを立案できる			
授業の進め方 学修上の助言		各グループのチューターとして酒井、古井、橋本、小峯、村西、森藤、久利、岡、畑中、肥田、中尾、今岡の各教員が指導する。グループワークになるので一人一人が協力して取り組んでほしい。			
授業時間外に必要な学修		担当した症例に関する医学的知識の確認をしておくこと		必要な時間	30 分以上
授業計画		1. 症例紹介のプロフィールに対するグループディスカッション 2. 理学療法評価計画の発表 3. 症例の全体像、ADL 状況、動作観察に対するグループディスカッション 4. 検査測定項目の発表 5. 検査・測定結果に対するグループディスカッション 6. 症例の障害構造についての発表 7. 評価内容に対するグループディスカッション 8. 理学療法プログラムについての発表 定 期 試 験（レ ポ ー ト） 9. 総括及びフィードバック（定期試験の解答・解説）			
成績評価方法	項目	■課題・小テスト 50%		■レポート 40%	
	内 容	毎回の課題内容		症例報告レポート	
		□定期試験 %		■その他 10%	
教科書	著者	タイトル		出版社	
	特になし				
参考文献	嶋田智明	障害別・ケースで学ぶ理学療法臨床思考		文光堂	
履修要件等		3 年次までの専門基礎科目・専門科目が履修済みであることが望ましい			
研究室	1 号館 1 階 理学療法専攻長室		オフィスアワー	毎週月曜日 14：40～16：10	

		授業形態	講義	開講年次	4 年次
授業科目名	精神科理学療法学		担当教員	沖田 幸治	
基本項目	専 攻	科 目 区 分		単 位 数	
	理学療法学	理学療法治療学		選択必修	1 単位
履修期間		後期（16h）			
授業内容の要約	リハビリテーション医療に携わる理学療法士に必要な精神医学並びに臨床心理学の基礎知識を理解し、精神・心理領域理学療法の臨床を学ぶ				
学修・教育目標 及び到達目標	1. 臨床心理学の基礎知識を理解し諸検査が実施できる 2. 精神医学の基礎知識を理解し臨床における症状学を理解する 3. 理学療法士国家試験の過去問題を理解し解答できる				
授業の進め方 学修上の助言	テキスト、配布資料並びにプレゼンテーションを中心に進行する。症例・事例紹介については、自身が臨床実習等で知りえた症例と比較検討できるようにする。国家試験問題をすべて解答できるようになる。				
授業時間外に必要な学修	指定された内容を予め調べておく			必要な時間	10 分以上
授業計画	1. リハビリテーション医学と理学療法に関連する精神医学・臨床心理学の基礎知識 理学療法士国家試験の傾向と対策 2. 臨床心理学 総論 3. 臨床心理学 各論① 4. 臨床心理学 各論② 5. 精神医学 総論、症状学 6. 精神医学 各論① 7. 精神医学 各論② 定 期 試 験（レポ ー ト） 8. 演習問題、総括（フィードバック）				
成績評価方法	項目	■課題・小テスト 15%	■レポート 15%	■定期試験 60%	■その他 10%
	内 容	理学療法士国家試験過去問題に関連する内容である。	学習目標達成に必要な内容について課題とする。	定期試験を実施する。理学療法士国家試験過去問題に準じた問題。	授業への参加度を加味する
教科書	著者	タイトル		出版社	発行年
	平川純一他	精神科・身体合併症のリハビリテーション		共同医書出版社	2015 年 1 月 10 日
	大熊輝雄他	現代臨床精神医学 改定第 12 版		金原出版	2008 年
参考文献	長嶺敬彦	抗精神病薬の「身体副作用」がわかる			
履修要件等					
研究室	1 号館 1 階 非常勤講師控室		オフィスアワー	授業終了後、質問を受け付ける	

		授業形態	講義	開講年次	4 年次
授業科目名	産業理学療法学		担当教員	古井 透	
基本項目	専 攻	科 目 区 分		単 位 数	履修期間
	理学療法学	理学療法治療学		選択必修	1 単位 後期（16h）
授業内容の要約	産業理学療法とは、仕事での動作・姿勢に由来する身体の損傷や健康被害の原因究明と、その対策を提案する理学療法の治療学的社会貢献である。この領域に必要な見識を深めながら、具体的な問題解決の方法の1つを使いこなせるよう習得する。				
学修・教育目標 及び到達目標	1. Ergonomics の視点を身につける 2. 疲労や作業姿勢の評価について知り、与えられた資料を使って評価を実施できる 3. 産業理学療法介入の意義について、広い視野から考えることができる				
授業の進め方 学修上の助言	コール教室で PC を使った作業姿勢評価の演習を中心にすすめ、課題・小テスト・期末試験も演習形式で実施する。実際に移乗技術を実技にて修得する。				
授業時間外に必要な学修	定期試験前に課題動画を作成する			必要な時間	30 分以上
授業計画	1. オリエンテーション Ergonomics 概論 2. 座位姿勢の定量的分析技術（小テスト） 3. OWAS（Ovako Working Posture Analysing System）の計算 4. 演習：Ovako 式作業姿勢分析システムソフト JOWAS による連続静止画デモ（課題） 5. 実習：系統発生的基本動作誘発技術（含ホイスト使用）の修得 6. 演習：腰痛予防職場評価（1）JOWAS による動画解析の応用 7. 演習：腰痛予防職場評価（2）（時間内定期試験） 8. 実習（フィードバック）滑らせる持ち上げない移乗技術の修得				
成績評価方法	項目	■課題・小テスト 40%	□レポート %	■定期試験 60 %	□その他 %
	内 容	授業内容に関する課題を課す。		成績は課題と定期試験(演習試験)をあわせて総合評価する	
教科書	著者	タイトル		出版社	発行年
	指定しない				
参考文献	ペヤ・ハルヴオール・ルンデ	「移動・移乗の知識と技術―援助者の腰痛予防と患者の活動性の向上を目指して」		中央法規出版	2005
	半田 一登,ほか(編)	「セラピストのためのリハビリテーション医療―すぐに役立つ実践書」		永井書店	2005
	澤口 裕二	アウェアネス介助論【上巻】【下巻】		シーニュ	2011
	大渊 修一、浦辺幸夫ほか	予防理学療法学要論		医歯薬出版	2017
履修要件等	生活環境学、医用福祉機器論を受講済みであることが望ましい				
研究室	1 号館 5 階 第 20 研究室		オフィスアワー	毎週火曜日 11：40～12：40	

		授業形態	実習	開講年次	4 年次
授業科目名	スポーツリハビリテーション		担当教員	橋本 雅至	
基本項目	専 攻	科 目 区 分		単 位 数	履修期間
	理学療法学	理学療法治療学		選択必修	1 単位 後期 (30h)
授業内容の要約	スポーツ特有の傷害(外傷と障害)を理解し、適切なリハビリテーションの方針を知るとともに、スポーツ外傷・障害の発生機序を理解することで健康増進における理学療法のあり方を考察する。				
学修・教育目標 及び到達目標	1. 理学療法士が関与していたスポーツ領域を説明する 2. 健康と運動について説明する 3. 損傷部位から受傷機転を推論できる 4. パフォーマンスを向上させるための方法を列挙できる 5. 障害構造から適切なトレーニング方法を選択できる				
授業の進め方 学修上の助言	講義は、教科書や講義内で配布する資料を中心に解説し、必要であれば実技を行うので、実技が可能な服装で出席すること。トレーニングや運動療法の手技を理解するため、理論背景の解説と実技練習を取り入れる。実技は、自分たちの自習時間を使って練習して体得するように努力すること。				
授業時間外に必要な学修	実技練習			必要な時間	60 分以上
授業計画	1. 理学療法とスポーツリハビリテーション 2. 投球動作：バイオメカニクス 3. 投球障害の病態運動学と障害論 4. 投球障害の理学療法 5. 投球障害に対するアスレティック・リハビリテーション 6. 下肢のスポーツ傷害(外傷と障害)の概要 7. 下肢傷害に対する理学療法について 8. 下肢スポーツ傷害に対するアスレティック・リハビリテーション 9. テーピングの理論と目的、適応 10. テーピング解説 11. テーピングのデモンストレーションと実技（足部・足関節） 12. テーピングのデモンストレーションと実技（膝関節、肩関節） 13. インソールの理論とスポーツ領域での役割 14. インソール適応のための評価手技(実技)、 スポーツ傷害を考慮したシューズの選択 15. 総括及びフィードバック（全講義の振り返り）				
成績評価方法	項目	■課題・小テスト 100%	□レポート %	□定期試験 %	□その他 %
	内 容	講義中の課題は、理学療法や、トレーニングの実技、テーピング実技に関係するテストを行う			
教科書	著者	タイトル		出版社	発行年
参考文献	臨床スポーツ医学 編集委員会	「新版スポーツ外傷・障害の理学診断・理学療法ガイド」		文光堂	2003
履修要件等					
研究室	1 号館 5 階 第 7 研究室		オフィスアワー	毎週月曜日 12：10～13：00	

			授業形態	講義	開講年次	4 年次	
授業科目名		ヘルスプロモーション論		担当教員	森藤 武		
基本項目	専 攻	科 目 区 分		単 位 数		履修期間	
	理学療法学	地域・予防医学的リハビリテーション		選択必修	1 単位	前期（16h）	
授業内容の要約		健康寿命の延長や疾病を減少させる予防リハビリテーション分野において必要な知識や介入方法を学び、ヘルスプロモーション分野においてリーダーとなれる力を養う					
学修・教育目標 及び到達目標		1. ヘルスプロモーションの意義を理解する 2. ヘルスプロモーション分野における評価 を理解し実践できる 3. ヘルスプロモーション分野における介入方法を提案できる					
授業の進め方 学修上の助言		講義および実技を行う。実技には、動きやすい服装で参加すること。					
授業時間外に必要な学修		授業の復習			必要な時間	30 分以上	
授業計画		1. 「加齢に伴う身体機能の変化」 2. 「肢体不自由児の二次障害に対する予防的リハビリテーション」 3. 「健康増進事業における身体機能の評価Ⅰ」 4. 「健康増進事業における身体機能の評価Ⅱ」 5. 「健康増進事業における身体機能評価」 測定会 6. 「ヘルスプロモーションの実践」 虚弱・転倒予防 7. 「ヘルスプロモーションの実践」 健康な身体づくり 定 期 試 験 8. 総括及びフィードバック（定期試験の解答・解説）					
成績評価方法	項目	■課題・小テスト 20%		□レポート %	■定期試験 80%		□その他 %
	内 容	測定会で実施した内容の理解度をレポートにて評価する			定期試験で講義全般の理解度を評価する		
教科書		著者		タイトル		出版社	発行年
参考文献		日本ヘルスプロモーション 理学療法学会		「理学療法士・作業療法士のための ヘルスプロモーション」		南江堂	2014
		大内尉義		老年学		医学書院	2014
履修要件等							
研究室		1 号館 5 階 第 8 研究室		オフィスアワー	毎週水曜日 12:00～13:00		

				授業形態	実習	開講年次	4 年次
授業科目名		臨床総合実習Ⅱ（PT）		担当教員	酒井 桂太・理学療法学専攻教員		
基本項目	専 攻	科 目 区 分			単 位 数		履修期間
	理学療法学	臨床実習			必 修	8 単位	前期（360h） 8 週間
授業内容の要約		臨床総合実習Ⅱは臨床総合実習Ⅰを踏まえて、さらに理学療法評価から治療までの実際を習得する。					
学修・教育目標 及び到達目標		1. 理学療法の評価・治療の実際を学ぶ 2. 検査・測定結果に対して臨床的推論を行ない、問題点を抽出し、目標を設定する 3. 指導の下で基本的な理学療法が実施できる 4. 臨床総合実習Ⅰを踏まえてさらに具体的な理学療法評価・治療の実際を体験する					
授業の進め方 学修上の助言		・実地体験学習。 ・臨床実習であるので、自ら学ぶ姿勢で実習に取り組んでいただきたい。 ・実習後のセミナーも実習中である意識をしっかりとっていただきたい。					
授業時間外に必要な学修		これまでに学習した理学療法評価学および理学療法治療学の実技の練習をしてください。				必要な時間	90 分以上
授業計画		・8 週にわたり病院で臨床総合実習を実施する ・実習後にセミナーにて症例発表会を行う					
成績評価方法	項目	□課題・小テスト %		□レポート %		□定期試験 % ■その他 100%	
	内 容					実習成績と実習報告セミナー、提出物等を総合して判定する。	
教科書		著者	タイトル			出版社	発行年
			「大阪河崎リハビリテーション大学 理学療法学専攻：実習の手引き第4版」				
参考文献							
履修要件等		実習要件 4) を満たしていること					
研究室		1 号館 1 階 理学療法専攻長室		オフィスアワー	毎週月曜日 14：40～16：10		

		授業形態	講義	開講年次	4 年次
授業科目名	統合作業療法学		担当教員	上島 健	
基本項目	専 攻	科 目 区 分		単 位 数	
	作業療法学	作業療法治療学		必 修	1 単位
	履修期間				
	後期 (30h)				
授業内容の要約	4 年間の集大成として、これまで学習してきた作業療法学に関する総合的な理解を深める。作業療法学専攻教員が中心となり、国家試験に準拠した知識面の整理を行う				
学修・教育目標 及び到達目標	1. 作業療法国家試験出題分野(専門・専門基礎分野)について、国家試験出題レベルの解釈ができる 2. 国家試験の出題パターンを理解し、過去問題に関連する知識を統合することができる 3. 事前学習を前提に演習問題を解き、国家試験レベルの応用力を修得することができる				
授業の進め方 学修上の助言	・オムニバス形式で実施し、作業療法学専攻教員が各専門・専門基礎分野の解説を行う ・広範囲にわたる事前学習を前提とし、作業療法士国家試験対策の講義・演習を中心に行う ・「個人学習」、「グループ学習」、「自主勉強会」などを計画的に進めること				
授業時間外に必要な学修	別途、講義概要に示した担当教員の授業範囲を予習			必要な時間	90 分以上
授業計画	1. ガイダンス (単位認定試験に関する説明、国家試験対策学習について) 2. 専門基礎分野国家試験問題の概観と学習方法について 3. 専門基礎分野と専門分野の国家試験について 4. I.基礎作業療法学 (作業療法の基礎、範囲、作業療法学の基礎) 5. II.作業療法評価学 その1 (目的、時期と手段、ICF、福祉用具) 6. II.作業療法評価学 その2 (義肢、装具、疾患、障害、保健、予防) 7. III.作業療法治療学 その1 (基礎、心身機能、身体構造) 8. III.作業療法治療学 その2 (活動、参加、背景因子等、福祉用具) 9. III.作業療法治療学 その3 (義肢、装具、疾患、障害、保健、予防) 10. III.作業療法治療学 その4【義肢装具関連 特別講師：田丸 佳希】 11. III.作業療法治療学 その5【発達関連評価と治療 特別講師：山田 剛】 12. IV.地域作業療法学 その1 (基礎) 13. IV.地域作業療法学 その2 (評価と支援) 14. V.臨床実習 (実習前準備、実習実施内容) 定 期 試 験 (単位認定試験) 15. 総括及びフィードバック (定期試験の解答・解説)				
成績評価方法	項目	□課題・小テスト %	□レポート %	■定期試験 100%	□その他 %
	内 容			定期試験は単位認定試験 1~3 として 3 回実施し、そのうち 2 回の試験で 60%以上の得点を合格とする。試験判定基準、授業日時、担当教員等は初講日に説明する。	
教科書	著者	タイトル		出版社	発行年
	医歯薬出版編集	第 49～53 回 理学療法士・作業療法士国家試験問題 解答と解説 (2018) CD-ROM 付		医歯薬出版	2018
参考文献	厚生労働省 ホームページ	平成 28 年版 理学療法士作業療法士国家試験出題基準 http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000058636.html			
履修要件等	4 年次前期までの全ての専門科目・専門基礎科目の履修が望ましい				
研究室	1 号館 5 階 第 14 研究室 (上島)		オフィスアワー	毎週木曜日 14:40～16:10	

				授業形態	演習	開講年次	4 年次
授業科目名		作業療法学 PBL		担当教員	谷口 英治 / 作業療法学専攻教員		
基本項目		専 攻	科 目 区 分		単 位 数		履修期間
		作業療法学	作業療法治療学		選択必修	1 単位	前期 (16h)
授業内容の要約		問題解決型学習方法論を取り入れ、症例検討を中心とした臨床実践基礎能力を学修する（知識・技術の再確認）					
学修・教育目標 及び到達目標		1. 症例のプロフィールから評価計画が立案できる 2. 症例の全体像から障害を予測し適切な評価項目が選択できる 3. 統合解釈ができる 4. 治療計画・治療プログラムが立案できる					
授業の進め方 学修上の助言		① クラス内をグループ別化し、各グループ間でグループディスカッションを通して 1 症例を検討する ② 検討した内容をグループ内で発表する ③ 全体発表する					
授業時間外に必要な学修		架空の症例を基に、評価・統合解釈・治療の流れを想定し、治療実施した結果をグループ内で検討できるように臨床実習で経験した症例をレビューしておくこと				必要な時間	60 分以上
授業計画		1. 症例紹介と各プロフィールに対するグループディスカッション 2. 症例の障害構造について発表と作業療法評価計画の発表 3. 評価項目の選定と評価結果に対するグループディスカッション 4. 各グループ間で評価結果の統合解釈ができる 5. 治療計画、治療プログラムに対するグループディスカッション 6. 治療計画、治療プログラムを立案できる 7. 各グループ全体発表会 定 期 試 験（レポ ー ト） 8. 総括及びフィードバック（定期試験の解答・解説） 【症例】 ① 統合失調症（谷口） ② 認知症（石川） ③ 脳血管障害（上島） ④ 未定 （ ）					
成績評価方法	項目	□課題・小テスト%		■レポート 80%	□定期試験	■その他 20%	
	内 容			症例検討から評価・治療計画プログラム立案に至る過程をレポートにまとめる。		課題への取り組み姿勢を重視します。	
教科書		著者	タイトル			出版社	発行年
			随時紹介				
参考文献							
履修要件等							
研究室		1 号館 5 階 第 18 研究室・他			オフィスアワー	毎週月曜日 16：20～17：00	

		授業形態	実習	開講年次	4 年次
授業科目名	臨床総合実習Ⅱ（OT）		担当教員	谷口 英治 / 作業療法学専攻教員	
基本項目	専 攻	科 目 区 分		単 位 数	
	作業療法学	臨床実習		必 修	9 単位
履修期間	前期（405h） 9 週間				
授業内容の要約	身体障害分野、精神障害分野、発達障害分野、高齢期障害分野から 1 分野の施設にて臨床実習を実施する。臨床の場で対象者（児）の評価法を修得し、さらに治療計画の立案・治療実施を経験し作業療法士としての基本的な役割を実践する。				
学修・教育目標 及び到達目標	1. 作業療法及び作業療法士の機能と役割を理解することができる 2. 対象者（児）の評価法を修得することができる 3. 治療計画を立案し、治療を実施することができる 4. 治療の結果を踏まえ、予後について考察することができる				
授業の進め方 学修上の助言	実習にふさわしい服装で臨むこと 一般社会常識、マナー、そして社会性が求められるため医療従事者として責任感のある行動・態度に配慮すること。 連絡・相談・報告や自己管理に十分注意を払うこと。				
授業時間外に必要な学修	臨床総合実習Ⅰの結果から得た課題を解決し、時期臨床実習への準備をしっかりと整えておくこと			必要な時間	90 分以上／週
授業計画	・身体障害分野、精神障害分野、発達障害分野、高齢期障害分野から 1 分野 9 週間の実習を実施する。 ・対象者（児）の評価を修得し、さらに治療計画の立案・治療実施を経験し、作業療法士としての基本的な役割を実践経験する。 ・治療結果を踏まえ再評価を行い、新たな治療計画の立案とともに予後予測についても考察する				
成績評価方法	項目	□課題・小テスト %	□レポート %	□定期試験 %	■その他 100 %
	内 容				① 「臨床総合実習Ⅱ」 評価の結果 ② 臨床実習出席日数 ③ 実習内容(症例報告書、実習ノート、実習態度等) ④ セミナーの参加状況から総合的に評価する
教科書	著者	タイトル		出版社	発行年
	臨床実習委員会編	「作業療法学専攻：実習の手引き」 第 4 版		大阪河崎リハビリテーション大学	2017
参考文献					
履修要件等					
研究室	各実習担当教員 研究室		オフィスアワー	各実習担当教員 オフィスアワー	

		授業形態	講義	開講年次	4 年次
授業科目名	言語聴覚障害学総論		担当教員	野村 和樹	
基本項目	専 攻	科 目 区 分		単 位 数	履修期間
	言語聴覚学	障害学総論		必 修 1 単位	前期（16h）
授業内容の要約	医療・介護・福祉・教育機関の臨床現場において、言語聴覚・摂食嚥下リハビリテーションを行う際に、必要な医学、薬理学、栄養学、看護学、歯科学、理学療法学、作業療法学、臨床心理学、工学、教育制度・社会保障制度等関連領域に関する知識・技能の再学習と整理統合を行い、対象児・者に対する多面的な理解と支援が理論の裏付けを伴った実践ができることを目指す。				
学修・教育目標 及び到達目標	1. 関連職種の職務内容、教育制度、社会福祉制度とその法的基盤について再学習する 2. 臨床現場で提供される関連領域からの情報を理解し、対象児・者へのアプローチに活用することが可能となる 3. 対象児・者の罹病期間やライフ・ステージに即した評価・訓練・環境調整・職種連携が可能となる				
授業の進め方 学修上の助言	講義、画像解析、実技演習、レポート作成 等				
授業時間外に必要な学修	指定された範囲の教科書、資料などを予め読んでおくこと			必要な時間	60 分以上
授業計画	1. X 線 CT、MRI、fMRI、PET と臨床症状【亀井】 2. 脳波(EEG)、筋電図(EMG)、心電図(ECG)と臨床症状【亀井】 3. バイタル・サインの診かた、主要な薬剤の影響について、診療情報の記録について【岡田】 4. 対象児・者の社会的支援：教育制度、言語聴覚療法管理学【高橋】 5. 言語聴覚士に必要な理学療法の知識：呼吸、排痰、移乗等【久利】 6. 言語聴覚士に必要な作業療法の知識：利き手交換、片手動作、使用手・補助手（書字、食事動作等【作業療法学専攻教員】） 7. 社会保障制度【野村】 8. 医療保険制度、介護保険制度【野村】 9. ふりかえり 定 期 試 験（レ ポ ー ト）				
成績評価方法	項目	□課題・小テスト % ■レポート 100 % □定期試験 % □その他 %			
	内 容	授業で学んだ知識を臨床場面でどのように活かせるかを問う			
教科書	著者	タイトル		出版社	発行年
	小寺富子監修	「言語聴覚療法臨床マニュアル 改訂第3 版」		協同医書出版	2014
	廣瀬 肇監修	「言語聴覚士テキスト 第2 版」		医歯薬出版	2011
参考文献	藤田郁代	「言語聴覚障害学概論」		医学書院	2010
履修要件等					
研究室	1 号館 4 階第 1 研究室		オフィスアワー	毎週木曜日 12:10～13:00	

			授業形態	講義	開講年次	4 年次
授業科目名	統合言語聴覚学		担当教員	高橋 泰子		
基本項目	専 攻	科 目 区 分		単 位 数		履修期間
	言語聴覚学	障害学総論		必 修	1 単位	後期 (30h)
授業内容の要約	これまでに学習した専門基礎分野と専門分野を統合して、言語聴覚障害学の応用を学ぶ					
学修・教育目標 及び到達目標	1. これまでに学習したことを確実に身につける 2. 専門用語や障害発生機序など、人に平易な言葉で説明できる力を身につける 3. 各分野との関連性を理解して、応用力を身につける					
授業の進め方 学修上の助言	座学が中心の講義形式となるが、グループ学習の成果も求める場合がある 小テストをして、学習の定着度を測る その状態により補講を行う場合がある 理解の状況により、30 時間以上の講義となる可能性は高い 平素の学習を怠らない					
授業時間外に必要な学修	毎回の授業の予習・復習を行う				必要な時間	6 時間以上
授業計画	1. 医学総論・生理学・病理学・精神医学【専門基礎分野 教員】 2. 内科学・リハビリテーション医学【医師】 3. 耳鼻咽喉科学(鼻・口腔咽頭喉頭科学) 形成外科学・臨床歯科学・呼吸器系医学【芦塚・高橋】 4. 耳鼻咽喉科学(耳科学)・聴覚系医学【馬屋原】 5. 臨床神経学・神経系医学【亀井】 6. 小児科学・形成外科学(口蓋裂)・構音障害【芦塚】 7. 音響学・聴覚心理学【馬屋原】 8. 認知学習心理学・心理測定法・臨床心理学【高橋】 9. 生涯発達心理学【木村】 10. 音声学・言語学・言語発達学【高橋】 11. 社会保障制度・医療福祉教育関係法規【野村】 12. 失語・高次脳機能障害学【芦塚】 13. 言語発達障害学【木村・高橋】 14. 音声障害・構音障害・嚥下障害【芦塚】 15. 聴覚障害【馬屋原】 定 期 試 験					
成績評価方法	項目	□課題・小テスト %		□レポート %		■定期試験 100 %
	内 容					□その他 %
教科書	著者		タイトル		出版社	発行年
	廣瀬肇監修		「言語聴覚士テキスト」		医歯薬出版株式会社	2011
	平野哲雄他編著		「言語聴覚療法 臨床マニュアル 第3 版」		協同医書出版社	2014
参考文献	伊藤元信・笹沼澄子編		「言語治療マニュアル」		医歯薬出版株式会社	2002
履修要件等	4 年生前期までのすべての科目が履修済みであることが望ましい					
研究室	1 号館 5 階 第 17 研究室		オフィスアワー	毎週水曜日 10:40～12:10		

				授業形態	演習	開講年次	4 年次		
授業科目名		言語聴覚学 PBL		担当教員	木村 秀生 / 言語聴覚学専攻教員				
基本項目		専 攻	科 目 区 分		単 位 数		履修期間		
		言語聴覚学	障害学総論		選択必修	1 単位	前期（16h）		
授業内容の要約		医療・介護・福祉・教育機関における言語聴覚・摂食嚥下リハビリテーションの対象児・者の事例を通して問題抽出、情報収集、評価・訓練・環境調整・職種連携の計画立案等、言語聴覚士として必要な介入手法を学ぶ。							
学修・教育目標 及び到達目標		1. 種々の言語聴覚障害、発達障害、高次脳機能障害、摂食嚥下障害について再学習する。 2. 言語聴覚障害、発達障害、高次脳機能障害、摂食嚥下障害と関連等の疾患及び治療を再学習する。 3. 社会保障制度、関連職種の職務内容とその法的基盤について再学習する。							
授業の進め方 学修上の助言		情報収集演習、症例の CT・MRI・ビデオ等の解析、検査演習、訓練演習、グループ討論、発表、小テスト等を実施する。							
授業時間外に必要な学修		既習の専門科目についての復習				必要な時間	60 分以上		
授業計画		1. 事例：成人失語症・高次脳機能障害【芦塚】 2. 事例：成人聴覚障害【馬屋原】 3. 事例：小児聴覚障害【馬屋原】 4. 事例：小児発達障害（肢体不自由、AAC）【木村】 5. 事例：小児発達障害（知的障害、自閉症）【高橋】 6. 事例：小児発達障害（学習障害、高機能自閉症）【高橋】 7. 事例：機能性・器質性構音障害【高橋】 8. 事例：音声障害【言語聴覚学専攻教員】 9. 事例：運動障害性構音障害、摂食嚥下障害【言語聴覚学専攻教員】 定 期 試 験 10. 総括及びフィードバック（定期試験の解答・解説）							
成績評価方法	項目	□課題・小テスト	%	□レポート	%	■定期試験	100%	□その他	%
	内容					各分野担当教員が講義内容に沿った問題を出題する。			
教科書		著者	タイトル			出版社		発行年	
		小寺富子 監修	言語聴覚療法臨床マニュアル改訂 3 版			協同医書出版		2014	
		廣瀬肇 監修	「言語聴覚士テキスト 第 2 版」			医歯薬出版		2011	
参考文献		藤田郁代	「言語聴覚障害学概論」			医学書院		2010	
履修要件等		3 年生までの全ての専門科目が履修済みであることが望ましい。							
研究室		1 号館 5 階 第 16 研究室			オフィスアワー	毎週水曜日 9：00～9：30			

		授業形態	実習	開講年次	4 年次
授業科目名	臨床総合実習		担当教員	木村 秀生 / 言語聴覚学専攻教員	
基本項目	専 攻	科 目 区 分		単 位 数	
	言語聴覚学	臨床実習		必 修	8 単位
履修期間	前期（320h） 8 週間				
授業内容の要約	医療・介護・福祉・教育機関において、言語聴覚・摂食嚥下障害のある方の実態と言語聴覚士の業務内容を理解し、対象児・者のニーズ把握とその解決に必要な支援の方法を学ぶ。				
学修・教育目標 及び到達目標	1. 評価結果から長期・短期の各目標を設定し実習指導者の下、計画に基いた訓練を施行できる。 2. 再評価を行い、結果に応じた訓練計画の再立案ができる。 3. 日々の臨床、カンファレンスにおいて他の言語聴覚士及び関連職種と連携し情報共有ができる。 4. 実習指導者の下、対象児・者とその周囲に対して指導・説明が行える。 5. 実習施設の組織や言語聴覚療法部門の運営・管理について学ぶ。				
授業の進め方 学修上の助言	・実習前指導では講義、情報検索、討論、ロールプレイ、演習、必要書類作成等を行う。 実習日誌は実習中毎日作成・提出し実習指導者の校閲・指導を受ける。実習終了時に一括して大学へ提出する。実習終了時は症例報告、実習報告レポート等を作成し実習指導者と大学に提出する。大学においてパワーポイントを作成し、実習報告会で発表する。 ・実習要件 3)（履修の手引き参照）を満たさなければ履修できない。4 年間の学習のまとめと今後の臨床の礎とする。欠席が 1/5 を超えた者は単位を取得できない				
授業時間外に必要な学修	臨床評価実習で指摘された課題を解決し本実習に臨むこと。			必要な時間	90 分以上／週
授業計画	【実習前指導】 ・社会人としての心得、対象児・者に対する心得 ・医療・介護・福祉・教育機関における心得（清潔概念、守秘義務、個人情報保護を含む） ・情報収集演習、症例ビデオの解析、検査演習、グループ演習 【臨床総合実習】 ・評価結果から短期・長期の訓練目標を設定し、実習指導者の下、計画に基いた訓練を行う。 ・再評価を行い、決壊に応じた訓練計画の再立案を行う。 ・日々の臨床・カンファレンスにおいて他の言語聴覚士・関連職種からの情報を共有し連携する ・実習指導者の下、対象児・者とその周囲に対して指導・説明を行う。 ・実習施設の組織や言語聴覚療法部門の管理運営について学ぶ。 【臨床総合実習報告会】 ・実習記録、症例報告、目標、結果、考察、今後の課題等をレポートにまとめ報告会で発表する。				
成績評価方法	項目	□課題・小テスト %	□レポート %	□定期試験 %	■その他 100%
	内 容				実習前指導・実習中・報告会の出席学修状況、提出物、実習指導者による評価等を総合判定する。
教科書	著者	タイトル		出版社	発行年
		大阪河崎リハビリテーション大学 言語聴覚学専攻：実習の手引き			
参考文献		適宜紹介			
履修要件等	実習要件 4) を満たしていること				
研究室	1 号館 5 階 第 16 研究室		オフィスアワー	毎週水曜日 9：00～9：30	